

言葉の意味とロジックについて考える

■ **峯島宏次** みねしまこうじ

文学部哲学専攻 准教授

人の思考やコミュニケーションを支える言語や論理とは何か、哲学と論理学を軸に基礎から応用まで学際的な観点から研究しています。

人は単なる文字や音の列から、いともたやすく情報を読み取り、それを整理して他の情報と組み合わせたり、また別の人に伝達したりすることができず。人からはつきりと規則を教わったわけでもないのに、私たちが日常的にこうした複雑な情報の処理を実現していることは実に不思議なことです。

言葉はどのようにして意味をもつのか、人が言葉によって何かを伝えるとはどういうことか、このような言語についてのさまざまな問いを考えています。もう一つの関心は論理の問題です。日常的に「なぜ」という疑問に答える営みから、哲学や数学で行われるような論証まで、私たちの「ものの見方」や知識を形作っている論理（ロジック）とはどのようなものなのでしょうか。

言葉や論理についての問いは伝統的に哲学や論理学に属する問いであると同時に、言語学や心理学、さらには人工知能や自然言語処理のような分野まで、分野横断的に研究されています。特に、言葉の意味やコミュニケーション

ンに関わる言語学の分野（意味論・語用論）の確立に、哲学や論理学は大きな役割を果たしてきました。本研究会では、哲学と論理学を軸にして、広く学際的な観点から言語と論理をめぐる問題に取り組んでいます。

「あ、ここに鍵があった」は「た」で終わるのにどうして過去に起こったことを報告する文ではないのか、「この店は高いけどまずい」と「この店は高いけどおいしい」ではなぜ同じ「けど」という接続の表現が使えるのか……こうした素朴な疑問から始まって、数理的なモデルの構築まで、多様な観点から教育と研究を行っています。人工知能や自然言語処理の分野では、コンピュータの性能向上と機械学習技術の発展により、言語をめぐる研究は10年前には予想もしなかったような状況が訪れています。基礎的な問題を考えながら、塾内外の共同研究者たちも交えて応用の問題に取り組みむことも教育と研究の重要な柱の一つです。



人に特有の営みをさまざまに解き明かす

あんどうりさこ 安東里沙子君 文学研究科修士課程1年

峯島研究会では、言語、思考、論理をテーマに、特定の人物や立場に限らず、さまざまな文献を読み、議論しています。学際的なテーマを扱っていることもあり、所属する学生の関心はさまざままで、他の研究会と両立させている人も少なくありません。私は論理、その中でも「証明とは何か」に関心があるのですが、なぜこの証明はこのように展開され、それが正しいといえるのか、他に証明は考えられないか、考えられたとしてそれは正しいのか、納得のいくまで問うことができます。同じ関心を持つ学生同士で、学年の枠を超えて集まり、勉強会をすることも多く、意欲的な仲間から刺激を受けつつ研究に励むことができます。

精神分析 psychoanalysis の新境地を開拓する

おかだ あきよし
岡田 暁宜

環境情報学部 教授

リベラルアーツとしての精神分析を目指して、現在80名の学生がさまざまな素材や体験をもとにグループワークを通じて多様な領域における精神分析的な研究を行っている。

精神分析とは、S・フロイト（1856～1939）とその後継者たちによって発展を遂げた人間の本質に関するメタ理論や現代思想であり、人間の深層心理の理解の方法であり、心理臨床における治療法でもある。本来、精神分析は、精神医学や臨床心理学などの専門性を習得した後に訓練を通じて体得する、高度な専門性を有する臨床技法である（サブスペシャリティとしての精神分析）。精神分析の概念には、独特な専門用語が多く、心の専門家の養成を目的としない湘南藤沢キャンパス（SFC）において、精神分析について教えたり学んだりすることについての意味があるのかという疑問を抱くかもしれない。

しかしSFCにおいて精神分析は、日本の精神分析を長く牽引してきた小此木啓吾教授（1930～2003）からその弟子である濱田庸子教授と森さち子教授へと引き継がれ、SFCの学際性の一部であり続けている。本研究会は、心の専門家のみに閉ざされた

精神分析ではなく、SFCにおける精神分析の歴史を継承し、一般の人々に開かれた精神分析を目指している（リベラルアーツとしての精神分析）。SFCから見える富士山の美しさは、山頂から流れるバランスのとれた裾野の広さがあるが、富士山の広大な裾野は、SFCにおける精神分析研究の可能性を象徴しているだろう。

本研究会では、学生は自らの関心や経験に基づくさまざまな領域におけるテーマを自由に決めて、主にグループワークを通じて主体的に研究に取り組んでいる。学生の自由な思考は、精神分析の自由連想を彷彿させるだろうし、SFCの理念を象徴しているだろう。本研究会を通じて、学生は精神分析や精神医学などの教員の専門性に触れることで「何か」を学び、教員は自らの専門性では学べない「何か」を学生から学んでいるだろう。精神分析は本質的に自然科学と人文科学の間にある学際的な学問であるが、SFCは精神分析を抱える環境といえるだろう。

精神分析×異分野で見えてくる本質

みずもとこうき

水本航輝君 総合政策学部2年

本研究会では、フロイトの精神分析をハブとして、各々が興味のある分野において精神分析を用いた研究をし、またそれを研究会に持ち寄ってみんなでさらなる心の深掘りをしています。人間の無意識に重点を置くなど、普段光の当たらない部分に光を当てるこの研究会では、臨床の場からの分析を超えて社会のあり方を議論することもあり、共に本質に迫っていく過程に大きな面白さを感じます。元々内科から転向して心の領域に来られた岡田先生が、臨床の場からのフィードバックをされ、普遍的真理を追究していくSFCの研究会だからこそ、心の領域と掛け合わせたさまざまな分野における新たな可能性を秘めていると感じます。

